

交通ルール学ぶ公園 50年

閉鎖危機乗り越え感謝祭

函館

函館市梁川町の梁川交通公園が、今年で開園50周年を迎えた。本物の信号や標



自転車の安全な乗り方講習も行われた感謝祭

識があり、半世紀にわたって子どもたちに交通の知識やマナーを教えてきた施設だ。14日には感謝祭が開かれ、2012年に閉鎖寸前に追い込まれた際、存続に向け奔走した同市元助役の山那順一さん(84)も出席した。

同園は「第1次交通戦争」と言われたころの1969年4月に開園。交通公園は、当時の建設省が主導し、全国各地に建設された。



閉鎖の危機の際、存続に向け奔走した山那さん(梁川交通公園で)

開園から43年が経過した2012年、函館の同公園は閉鎖の危機を迎える。行政改革で「廃止を含む見直し」対象にされ、跡地をゲートボール場に転用する計画が持ち上がったのだ。老朽化したゴーカートの更新が急務だったが、1台約90万円のゴーカートを購入する予算は市になかった。

山那さんは市助役を退任し、当時は同公園の指定管理団体「函館中央交通安全協会」の会長。公園廃止の計画を聞いた際は「交通事故から子どもの命を守る施設をなくすとは何事だ、と怒りがわいた」と振り返る。

「子どもたちが遊びながら交通ルールを学ぶ場所は、他にはありません」。山那さんは各地で講演して交通公園の必要性を訴え、様々な企業や団体に出向いて、寄付を依頼した。

賛同した慈善活動団体「国際ソロプチミスト函館」が足踏み式のゴーカートを3台、ロータリークラブが動方式のそれを3台、それぞれ寄贈。地元の企業は老朽化した信号機を最新式LEDの信号機と交換し、交通標識などを無償で整備した。交通安全活動で藍綬褒章を受章した市民が、祝賀会を取りやめ、浮いた費用を寄付したこともあった。

閉鎖の危機から2年後の14年には、市が動力式ゴーカート2台170万円の予算を計上し、公園の存続が決まった。

14日の感謝祭の席で山那さんは「函館は子どもが遊ぶ施設が少なく、商工観光部長の時、水族館を設置しようと頑張ったが、実現できなかった。だから交通公園はどうしても残したかったです」と話した。